

昨年 5 月に大西氏の訃報に接し、まさに驚天動地の心境でした。彼とはあまり個別にお話しをしたことはなかったものの、彼が大学院生時代から細々と接しておりました。その時以来の呼び方から、(親しみを込めて) ここでは氏を大西君と呼ばせて頂きます。今回、大西君を追悼するメッセージを募集されているということですので、この機会にこれまでのふれあいを思い出しながら、追悼メッセージとさせて頂きたいと思います。

大西君との最初の出会いは、私の RCNP 在籍時 (1988 年～1990 年) に、京都大学原子核理論研究室のセミナーに招かれ同研究室を訪れた時だったと思います。私の話に活発に質問してくれ、とても元気の良い院生だなという印象を受けました。さらにその後、今度は RCNP でのセミナーに大西君を招待し、当時売り出し中だった反対称化動力学 (AMD) の話を聞きました。原子核構造研究を変える手法の展開ということで、実に意気軒昂な、圧倒されるような発表でした。優秀である事はもちろんですが、” 元気よく活発な…”、という (彼に対する) 印象はこうして定まりました。

その後は私は札幌の大学に移りましたが、大西君も 1993 年に北海道大学に着任しました。こうして、また北大研究室のセミナーなどを通じて彼との付き合いが続きました。この時期の彼に対する印象は上の ” 元気良く活発な…” にあわせて、常に物事をポジティブ・前向きに考える ” 強さ ” です。当時は加藤先生とお二人での運営ながら、多数の院生を育成されました。当然、色々と苦勞もあったのでは、と推測します。しかし、そういう素振りほとんど表に出さず、いつも口から出てくるのは「今度はこういう方向に研究展開ができると考えています」という前向きな抱負でした。つい大学業務について愚痴を言いたくなるような自分を恥だ次第です。

また、楽しい思い出もあります。当時は北大グループで毎年、合宿形式の地域スクールを行っていました。夜は、スタッフと院生に加えて研究室 OB も加わり ” 宴会 ” となります。その場で、大西君が何名かの院生を相手に ” 院生指導 ” よろしく (研究者の心得などの伝授か!?) 遅くまで話し込んでいました。ところが、翌朝、セミナー開始時刻になっても大西君だけ姿を見せません。そこで、院生にセミナー会場に連れられてきた次第です。さすがの彼も「面目ありません…」と謝罪しました。体力的には、院生のほうが上だったようですね…。

最後に、昨年の訃報の後、「事実として受け入れるのが難しい…」と嘆く声を、特に彼の教え子に当たる人たちから伺いました。” 元気よく活発な、そして常に前向きな ” 彼が、突然いなくなったことの喪失感はとても大きいものだったことでしょうか。このことは、研究だけでなく、人間としての付き合いも深かったことの証左だと思います。特にご遺族の方の喪失感は想像するに余りあります。何とも致し方ないところではありますが、このよう

な追悼メッセージが集まり、皆さんが大西君を偲ぶ気持ちを共有することで、関係する皆さんのお気持ちが少しでも癒されることをお祈りします。常に前向きな彼はそれを望んでいることと思います。

以上、拙い追悼メッセージで失礼しました。

森田 彦（札幌学院大学経済経営学部・教授）